ー原著ー

健常高齢者の歯周組織健康状態およびその経年変化に関する研究

廣富敏伸，葭原明弘，宮崎秀夫

新潟大学大学院医歯学総合研究科　口腔生命科学専攻　口腔健康科学講座　口腔健康推進学

Longitudinal study on periodontal conditions in healthy elderly people in Japan

T. Hirotomi, A. Yoshihara, H. Miyazaki

Department of Oral Health Science Division of Preventive Dentistry

平成14年４月24日受付　　４月24日受理

【目　的】

喪失歯は60歳代以降で急激に増加しており，高齢者における歯牙喪失抑制のためにも歯周病対策は必要不可欠である。しかし，高齢者の歯周組織に関する詳細な疫学調査データは依然として不足している状況である。本研究の目的は高齢者における歯周病の自然史を把握すること，さらに歯周病の進行に影響を与える口腔内局所要因について検討することである。

【対象および方法】

70歳599人，80歳162人を横断調査の対象とし，このうちの70歳について２年後に経年調査を実施した。Pocket Depth（PD）とAttachment Level（AL）を１歯あたり６点について計測した。有歯顎者を歯周組織に関する分析対象とした。歯周病重症度として，ALが４mm以上を中等度，７mm以上を重度と定義した。さらに，診査部位各点で３mm以上ALの増加が認められた場合に歯周病が進行したものと定義した。これらの定義に基づき，歯周病有病率および歯周病進行経験率を人および歯単位でそれぞれ求めた。さらに多重Logistic回帰分析を用いて，重度歯周病，歯周病進行，および歯の喪失に影響を与える口腔内局所要因について検討した。

【結　果】

横断調査の結果，中等度の歯周病有病者率は97.1%であった。また，重度の歯周病有病者率は47.9%，重度の歯周病有病者における一人平均重度歯周病歯数は2.8本であり，年齢差はともに認められなかった。さらに，対象歯の54.9%に中等度，7.7%に重度の歯周病が認められ，いずれも80歳の方が有意に高かった。多重Logistic回帰分析の結果，重度の歯周病有病歯と有意に関連していた変数は年齢，性別，現在歯数10-19本群，20本以上群，上顎大臼歯，下顎小臼歯，下顎大臼歯，未処置歯，充填歯，ブリッジ支台歯であった。

縦断調査の結果，歯周病進行経験者は75.1%であり，経験者における一人平均経験歯数は4.7本であった。また，対象歯の19.0%に歯周病進行が認められ，3.4%が喪失していた。歯周病進行経験歯の要因として有意な関連の認められた変数は性別，現在歯数20本以上群，Baseline時の歯の最大PD，Baseline時の歯の最大AL，上顎大臼歯，下顎大臼歯，充填歯，鉤歯であった（表１）。同様に喪失歯の要因として認められた変数は現在歯数10-19本群，20本以上群，Baseline時の歯の最大AL，上顎前歯，上顎大臼歯，下顎大臼歯，未処置歯，ブリッジ支台歯，クラウン，鉤歯であった（表２）。

【考　察】

横断調査の結果から，70歳以上の者では約半数が重度の歯周病に罹患していると考えられる。しかし，重度歯周病有病者率と一人平均重度歯周病歯数の関係から，高齢者においても重度の歯周病を全歯的に有している者はほとんどいないと考えられる。

横断調査で大きな年齢差が認められなかったのに対し，縦断調査では歯周病の進行が75.1%の者に認められた。さらに，横断調査で重度の歯周病有病歯率は7.7%と低かったのに対し，縦断調査で歯周病進行経験歯率は19.0%と低くなかった。この背景として，70歳から80歳